

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第201集

# 大 平 本 城

2015

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団  
愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第201集

おお だいら ほん じょう  
大 平 本 城

2015

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団  
愛知県埋蔵文化財センター



# 序

愛知県豊田市は、愛知県の中央部に位置しております。世界的に有名なトヨタ自動車の本社の所在地として知られています。歴史的にも文化財が多数所在しており、古くから繁栄した場所でもあります。大平町は西加茂郡小原村の一部となっておりますが、平成17年に小原村が豊田市と合併したため、現在は豊田市大平町となっております。

ところで、小原地区は今日でも伝統的な丘陵部のイメージが色濃く残っております。特産品としては三河森下紙の名で知られる番傘用の和紙生産が盛んでした。昭和初期には著名な工芸家である藤井達吉との関わりをきっかけとして美術工芸紙の分野も開拓され、今日では絵模様を漉き込んだ和紙工芸品へと方向転換しております。また、各所に植栽された「四季桜」は、紅葉とともに見られるサクラとして注目されており、シーズンには風光明媚な景観を求める来訪者でにぎわっています。

愛知県埋蔵文化財センターでは、平成23年度に急傾斜地崩壊対策事業に先立つ大平本城の発掘調査を、愛知県の委託事業として実施致しました。その結果、先人の生活・文化に関するいくつかの貴重な知見を得ることができました。

この度、調査によって検出されました遺構や出土遺物をまとめて、報告書として刊行するにいたしました。本書が歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財に関するご理解を深める一助となれば幸いに存じます。

発掘調査の実施に当たりましては、地元住民の方々を始め関係諸機関及び関係者の皆様方から多大なご指導とご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

平成27年3月

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

理事長 伊藤 克博

# 例 言

1. 本書は愛知県豊田市大平町に所在する大平本城（遺跡番号は 663001）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は愛知県建設部砂防課による急傾斜地崩壊対策事業に先立つもので、愛知県教育委員会を通じて委託を受けた愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は面積 310㎡で、平成 23 年度に実施した。期間は 10・11 月で、担当者は池本正明（本センター調査研究専門員、現主任専門員）である。なお、発掘調査は、株式会社波多野組に支援を受けている。波多野組の担当者は、代理人が猪腰益巳、調査補助員が小泉信吾、測量技師は森田義史・尾崎裕司である。
4. 調査に際しては、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室・愛知県埋蔵文化財調査センター・愛知県建設部・豊田市教育委員会を初めとし、多くの機関から指導・協力を受けた。
5. 調査区の座標は、国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系に準拠した。表記は世界測地系を用いている。なお、海拔標高は T. P.（東京湾平均海面標高）による。
6. 遺構は以下の分類記号を用い、原則として調査時の表記をそのまま使用している。  
SK: 土坑、SD: 溝、SA: 土塁、SX: その他の遺構
7. 本書の編集には、以下の方々にご教示・ご協力を得た。（五十音順・敬称略）  
浅井 敏・天野暢保・石川浩治・内田智久・奥田敏春・加藤裕康・杉浦裕幸・高田 徹・高橋健太郎・竹内峯久・三宅唯美・森 泰通
8. 本書の執筆・編集は池本正明が担当した。
9. 整理作業は、池本正明が阿部裕恵・木下由貴子・堀田祐美（本センター整理補助員）の協力を得て実施した。ただし、遺物実測とトレース作業、挿図作製の一部を株式会社イビソク・有限会社アルケリサーチに、出土遺物の写真撮影は写真工房 遊に、科学分析を株式会社パレオ・ラボに、デジタル編集は有限会社アルケリサーチに作業委託した。
10. 調査に関する実測図・写真などの資料は本センターが、出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターが保管している。なお、遺物は本書に記載された番号を登録番号とした。
11. 本書の書名となる「大平本城」は様々な文献にも登場するが、若干の名称差が存在する。詳細は第 4 章に記述する。本書では愛知県教育委員会との契約時の名称に従う。

# 目次

|               |    |
|---------------|----|
| 第1章 はじめに      | 1  |
| 1 経緯と経過       | 1  |
| 2 環境と周辺の遺跡    | 4  |
| 第2章 遺構        | 5  |
| 第3章 遺物        | 13 |
| 第4章 まとめ       | 16 |
| 1 主要遺構の変遷     | 16 |
| 2 大平本城と今回の調査区 | 16 |

## 挿図目次

|                      |    |                     |    |
|----------------------|----|---------------------|----|
| 図1 周辺の遺跡 1:25,000    | 2  | 図8 008SA・005SD 1:50 | 12 |
| 図2 調査区位置図 1:5000     | 6  | 図9 遺物実測図 1:4        | 14 |
| 図3 調査区壁面図 1:200・1:50 | 7  | 図10 焼土塊             | 15 |
| 図4 001SK・009SX 1:50  | 8  | 図11 遺構変遷図 1:300     | 17 |
| 図5 007SA 平面図 1:50    | 9  | 図12 地形測量図 1:500     | 18 |
| 図6 007SA 縦断面図 1:50   | 10 | 図13 周辺の地籍図          | 20 |
| 図7 007SA 横断面図 1:50   | 11 | 図14 縄張図             | 22 |

## 表目次

|          |   |
|----------|---|
| 表1 調査工程表 | 1 |
|----------|---|

## 図版目次

|              |       |
|--------------|-------|
| 図版 1 調査区全体図1 | 1:100 |
| 図版 2 調査区全体図2 | 1:100 |

## 写真図版目次

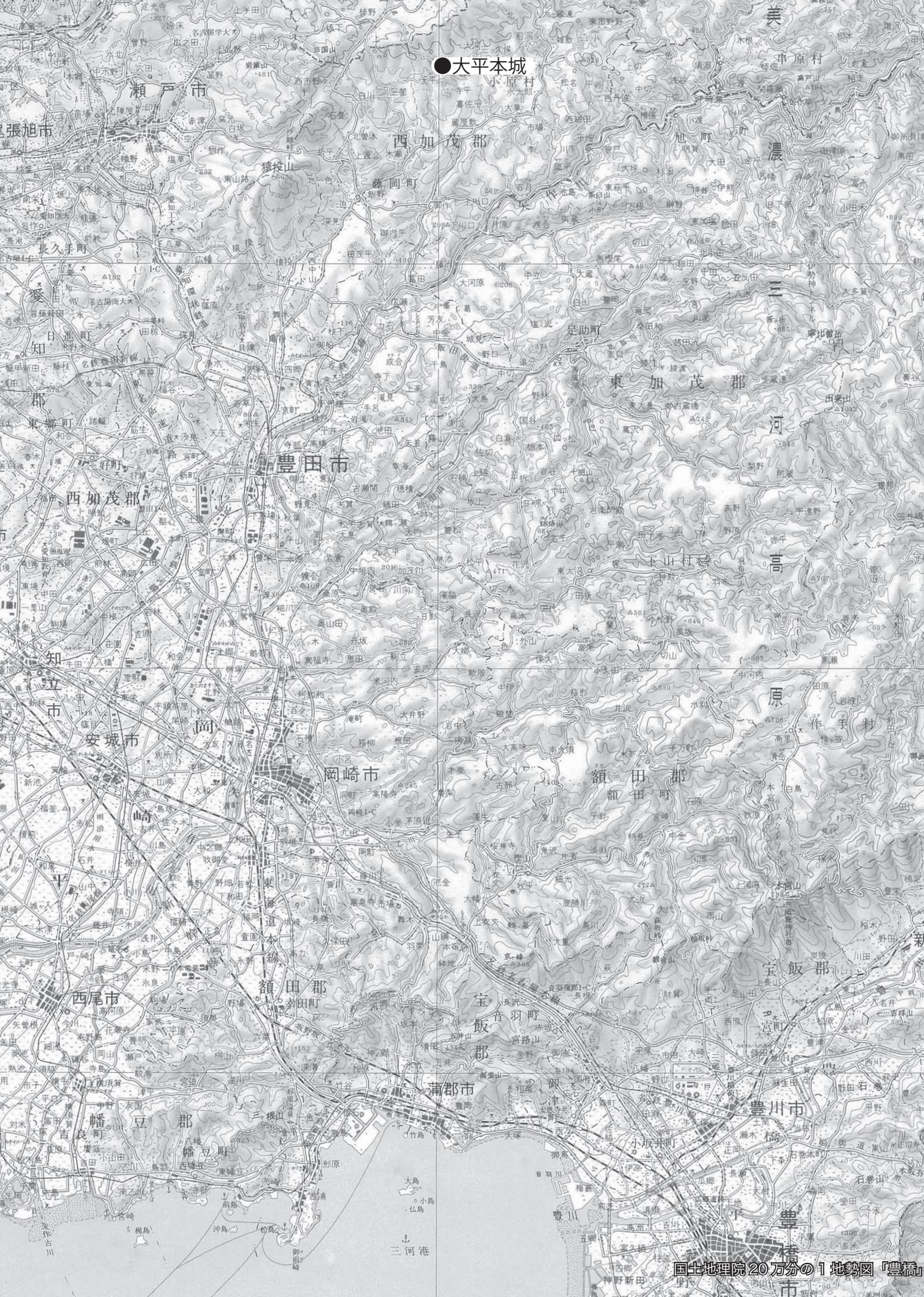
|              |                |
|--------------|----------------|
| 写真図版 1 調査区遠景 | 写真図版 3 遺構・出土状況 |
| 写真図版 2 遺構    | 写真図版 4 出土遺物    |

## 巻頭

|       |           |
|-------|-----------|
| 遺跡位置図 | 1:200,000 |
|-------|-----------|

## 添付CD-ROM

|        |                                  |
|--------|----------------------------------|
| 添付データ1 | 遺構計測一覧                           |
| 添付データ2 | 遺物計測一覧                           |
| 添付データ3 | 大平本城出土焼土塊中の植物珪酸体<br>(株式会社パレオ・ラボ) |



●大平本城

# 第1章 はじめに

## 1 経緯と経過

愛知県建設部では、災害防止を目的に急傾斜地崩壊対策事業を計画した。ところがこの計画区域内には、周知の遺跡である大平本城が所在していた。このため、愛知県建設と、愛知県教育委員会とがその取り扱いを巡って協議した。その結果、遺跡を発掘調査して記録として保存することが決定した。

発掘調査は、愛知県教育委員会を通して委託を受けた愛知県埋蔵文化財センターが実施した。調査は平成22(2010)年5月に実施された範囲確認調査の成果を基にして、面積310㎡が調査対象とされた。調査にあたっては、調査外に排土置き場などの作業領域の確保が困難であるため、調査区を3区分して実施した。

調査期間は平成23(2011)年10月・11月で、工程は表1に示した。地元説明会は見学者に対して安全が確保できないなどの理由で断念し、調査終了後の12月3日に豊田市大平児童館にて成果報告会を開催している。参加者は40名を数えた。

発掘調査は、株式会社波多野組の支援を得た。調査は全ての作業を人力で実施する予定であったが、土砂の流失防止と調査時の排土量の目安を得るために設定したトレンチの断面観察により、人力掘削のみでは膨大な労力が必要な事が判明した。このため、表土ハギ及び排土整地を目的として、調査区に小型のバック・ホウとクローラダンプをクレーンを使用して搬入した。

調査区は排土処理のためA～C区に三分割して実施し、表土除去後に平面直角座標第Ⅶ系(世界測地系)に準拠したグリッドを設定し、手掘りで遺構・掘削を検出する方法をとった。なお、最も広いA区ではラジコンヘリによる写真撮影も実施している。

### ▼ 調査前風景



表1 調査工程表

|     |        |                 |
|-----|--------|-----------------|
| 10月 | 中旬     | 調査開始            |
|     | 中旬～下旬  | 調査準備            |
|     | 24・25日 | A区表土ハギ          |
|     | 下旬     | A区遺構検出・掘削       |
| 11月 | 2日     | 空撮(A区)          |
|     | 4日     | A区補足調査          |
|     | 上旬     | A区埋め戻し、B・C区表土ハギ |
|     | 中旬     | B・C区遺構検出・掘削     |
|     | 下旬     | B・C区補足調査        |
|     | 下旬     | 埋め戻し・資材撤去       |
| 12月 | 3日     | 成果報告会           |
|     | 上旬     | 法的手続き           |

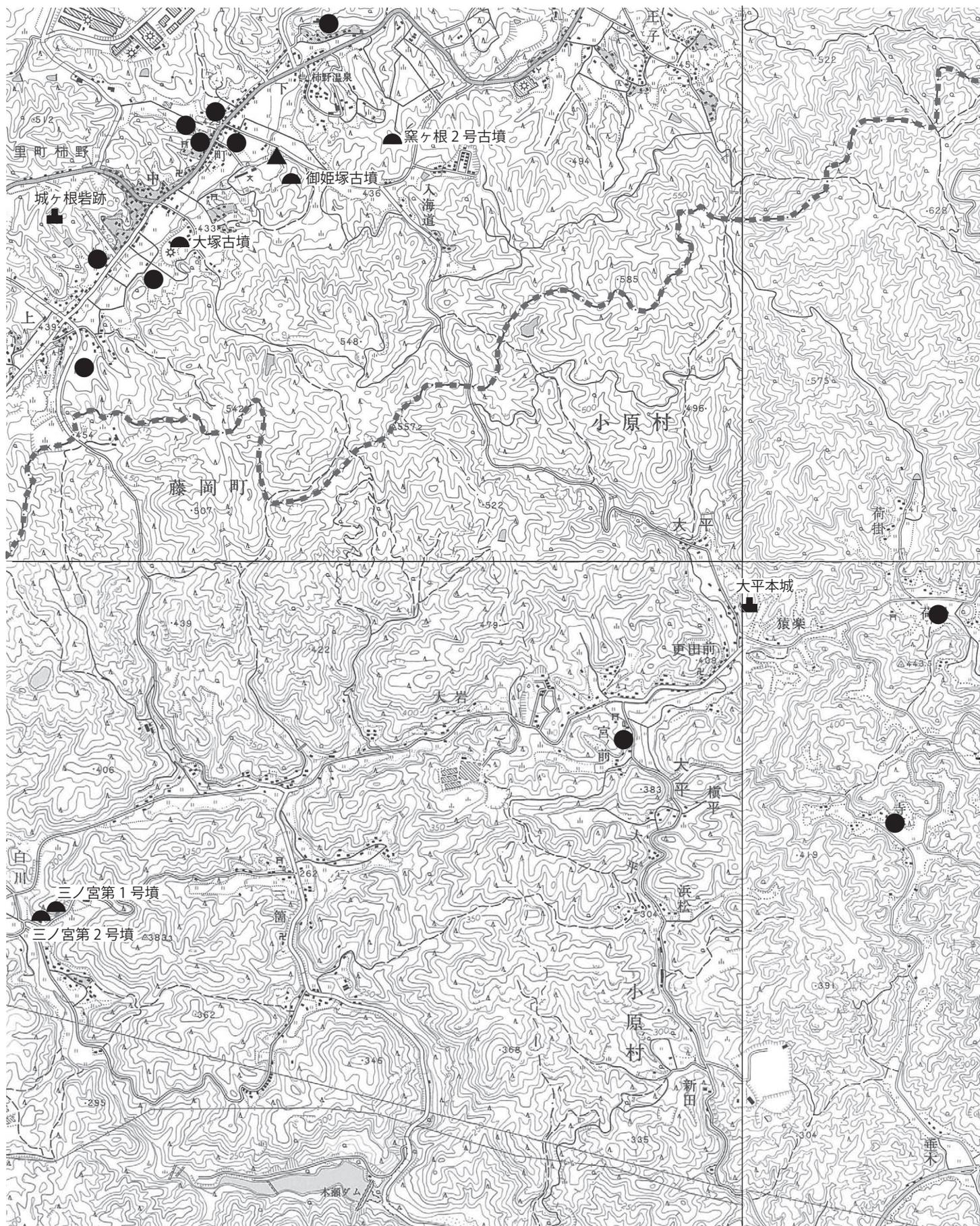
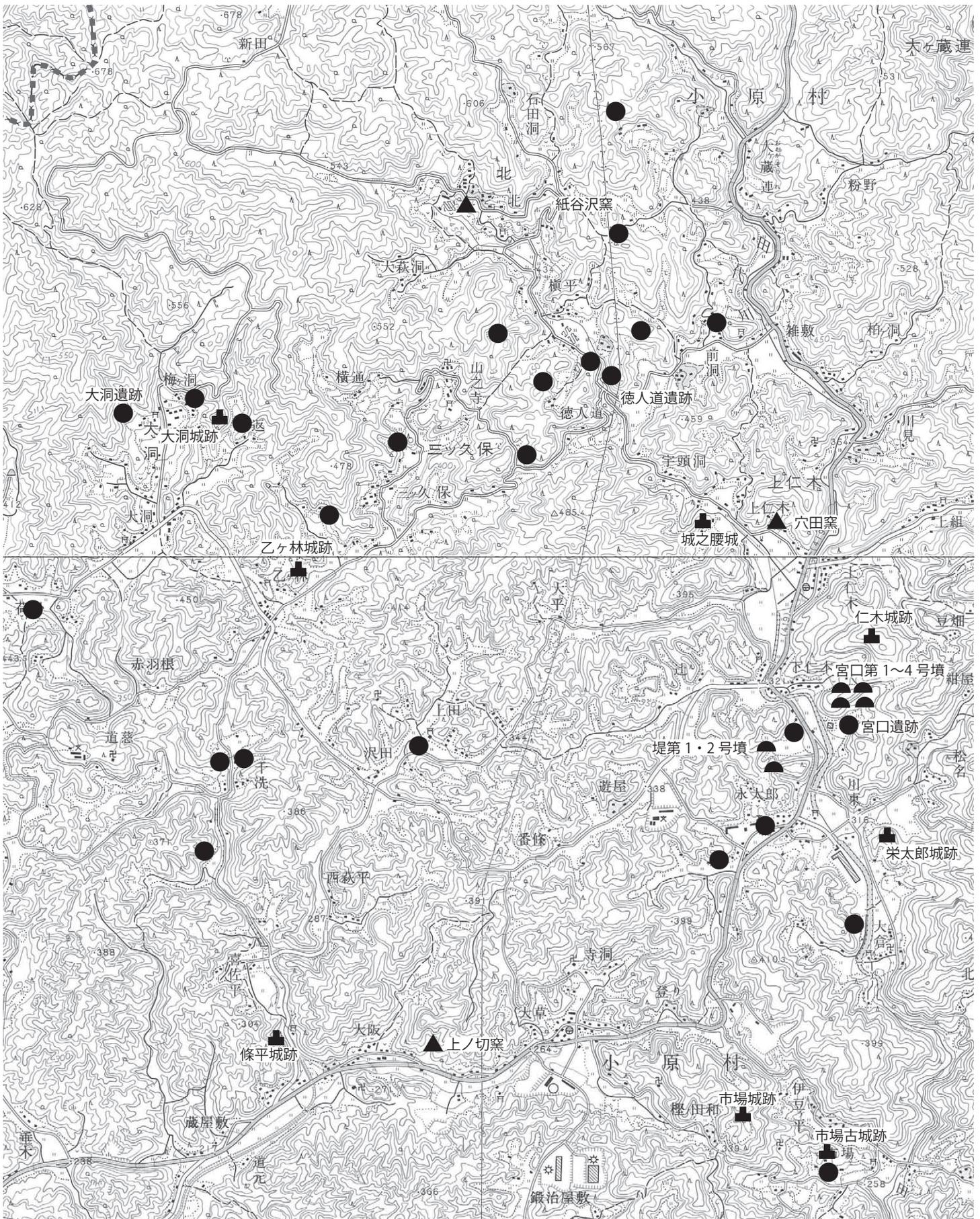


図1 周辺の遺跡 1:25,000



## 2 環境と周辺の遺跡

今回発掘調査を実施した地点は、東経 137°14'46"、北緯 35°15'7" で、現在の行政区画では豊田市大平町の北西部となる。これを道路網で説明すると、県道 19 号線と県道 485 号線の合流点の北西 0.1km 地点に該当する。

遺跡周辺のランドマークは、南東 2.8km に豊田市小原支所、南東 1.3km に豊田市立道慈小学校、南東 4.5km には豊田市立小原中学校、北北西 2.8km には岐阜県土岐市立鶴里小学校がある。

周辺の地形を概観すると、小原地区の周囲に展開する丘陵地は美濃・三河高原と呼ばれ、開析準平原地形となっている。小原地区周辺では 300 m～400 m 程度の山が連なる様相を呈し、これらの合間を縫って西端に大平川、中央から南西では犬伏川、北端部からは南に向かい田代川などの河川が存在している。

小原地区を含む周辺の丘陵地は、地質的には花崗岩地帯となる。風化した花崗岩を地元では「さば」と呼び、陶土・建設資材などに活用している。粒形を水洗作業によってそろえる事が通常で、このための小規模なプラントが河川沿いに点在している。

次に遺跡周辺の歴史的環境を概観する。大平本城の周辺は、遺跡の希薄な地域となっている。図 1 の示す範囲では遺跡の集中部分が南東隅と北西隅に確認できるが、北西部は岐阜県土岐市鶴里町となる。南東隅で目を引くのは、永太郎町・下仁木町に広がる 7 世紀代の群集墳である。各地で確認できるのが城跡で、小原地区の中心的位置を占める市場城跡（大草城跡）が最も代表的となる。この遺跡は近接する市場古城とともに鱸氏の居城として知られ、鱸親信が長禄 3（1459）年に足助の鈴木忠親から小原谷二千貫の土地を与えられたのを契機とすると伝える。その他、比較的大規模な城跡として、大洞城跡・乙ヶ林城跡・仁木城跡などが知られている。なお、窯跡も点在するが、図中に表現したものはいずれも近代となる。

大平本城は、現在の県道 19 号線と県道 353 号線の合流点に近接する。県道 19 号線は明治 45（1912）年の『小原村役場土木関綴』に「多治見街道」と記載され（小原村誌編集委員会 1964）、主要街道ではないものの古くから存在したものと考えられる。西側は丘陵を上り、峠越えて岐阜県土岐市鶴里町に到達する。つまり、大平本城は美濃と接する三河外縁部に、美濃側からは丘陵を降りた最初の平坦面を眼下に見据えた場所に立地している。

なお、大平本城に近接して大平姫城が存在するが、両者は有機的に関連するものと考えられている。大平本城は主郭と県道 19 号線の路面（標高 360 m）との比高が 36 m。規模（長辺）は 130 m、大平姫城は路面との比高が 22 m。規模は 50 m となる。

### 参考・引用文献

小原村誌編集委員会 1964 『小原村誌』

高橋健太郎他 2013 『豊田市遺跡分布調査報告書』 - 藤岡・小原・足助・旭・稲武・下山地区 - 豊田市教育委員会

## 第2章 遺構

今回の調査区は、大平本城主郭の西側斜面に該当している。調査区地表面の状況は、中央部に三段の平坦面が存在していた。標高は上段から順に 381 m、378 m、374 m で、下段と主郭（標高 396 m）の比高は 22 m。調査区外となる西側は急峻な斜面となる。眼下には県道 19 号線（土岐足助線）が南北に伸びる。路面（標高 360 m）と下段との比高は 14 m をはかる。基本層序は基盤層となる黄褐色細礫層の上に、0.9 m 程度の黄褐色もしくは褐色の堆積層が覆う。

前述の様に、調査にあたっては調査区を A～C の 3 地区に区分して実施している（図版 1・2）。調査時は各調査区毎に遺構番号を付けたが、記述が煩雑となるため、本書では遺構番号の再編成を実施している。なお、調査区別遺構番号との対応は CD-ROM に格納する遺構計測一覧（添付データ 1）を参照とする。

### 001SK（図 4）

調査区北側の中段の平坦面で検出された。長辺 1.8 m、短辺は 0.8 m まで計測できる。検出面からの深さは 0.3 m。南面側が不鮮明となるが、平面形は楕円形を呈するのかわ。010SX と近接するが、関連は不明。出土遺物は確認されなかった。

### 002SK（図 3）

調査区南側の下段の平坦面で検出された不整形な土坑。003SK・007SA を切る。南端は南壁に設定したトレンチ内で、南壁面では確認できない。検出できた一辺は 3.0 m、検出面からの深さは 0.3 m。出土遺物は 1～10 を図示した。

### 003SK（図 3）

調査区南側で検出された不整形な土坑。006SD・009SX を切り、002SK に切られる。埋土には炭化物や焼土塊を含む。南端は調査区外となる。検出面からの深さは 0.1 m。出土遺物は 11～14 を図示した。

### 004SK（図版 1）

調査区北側の下段の平坦面で検出された。008SA を切る。東側と北側は調査区外となる。長辺 1.1 m、短辺 0.5 m まで計測でき、検出面からの深さは 0.1 m で、平面形は楕円形を呈するのかわ。出土遺物は、図示していないが近世陶器の細片を 1 点得た。

### 005SD（図 8）

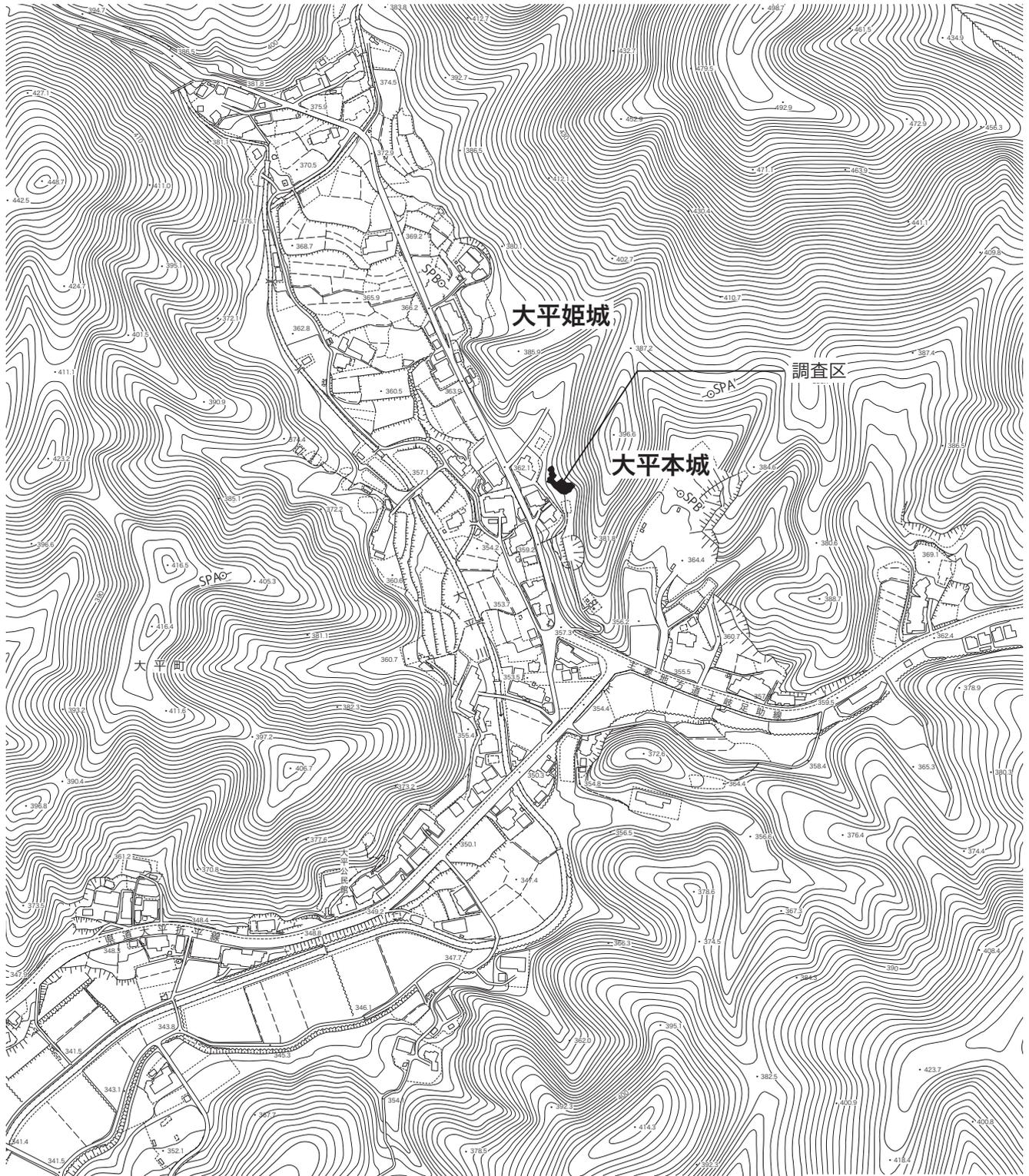
調査区北側で検出された。008SA を切る。全長 4.4 m を検出したが、東西側ともに調査区外となる。幅は 0.8 m 程度。検出面からの深さは 0.6 m で、主軸は N-119°-E。出土遺物は 15 を図示した。

### 006SD（図版 1）

調査区北側の下段の平坦面で検出された。不整形だが、溝として理解した。全長 7.5 m を検出したが、西側は調査区外となる。東側は大きく幅を拡げ、端部を 003SK に切られる。幅は西側で計測すると 1.8 m 程度。検出面からの深さは 0.6 m となる。西側の主軸は N-112°-E 前後。出土遺物は 16・17 を図示した。

### 007SA（図 6・7）

調査区東側で全長 14 m を検出したが、南北の端部は調査区外となる。幅 8.0 m、図 7 の D ラインで計測した高さは 1.2 m 程度で、主軸は N-59°-E。西側は下段平坦面と接するが、この部分は緩やかに屈曲する。断ち割り調査の結果、盛土直下で基盤層が若干盛り上がる状況も確認でき、成形時に基盤層の



SPA

SPA'

『豊田市基本図』よりトレース

L=400.000m

SPB

SPB'

L=400.000m

図2 調査区位置図 1:5000

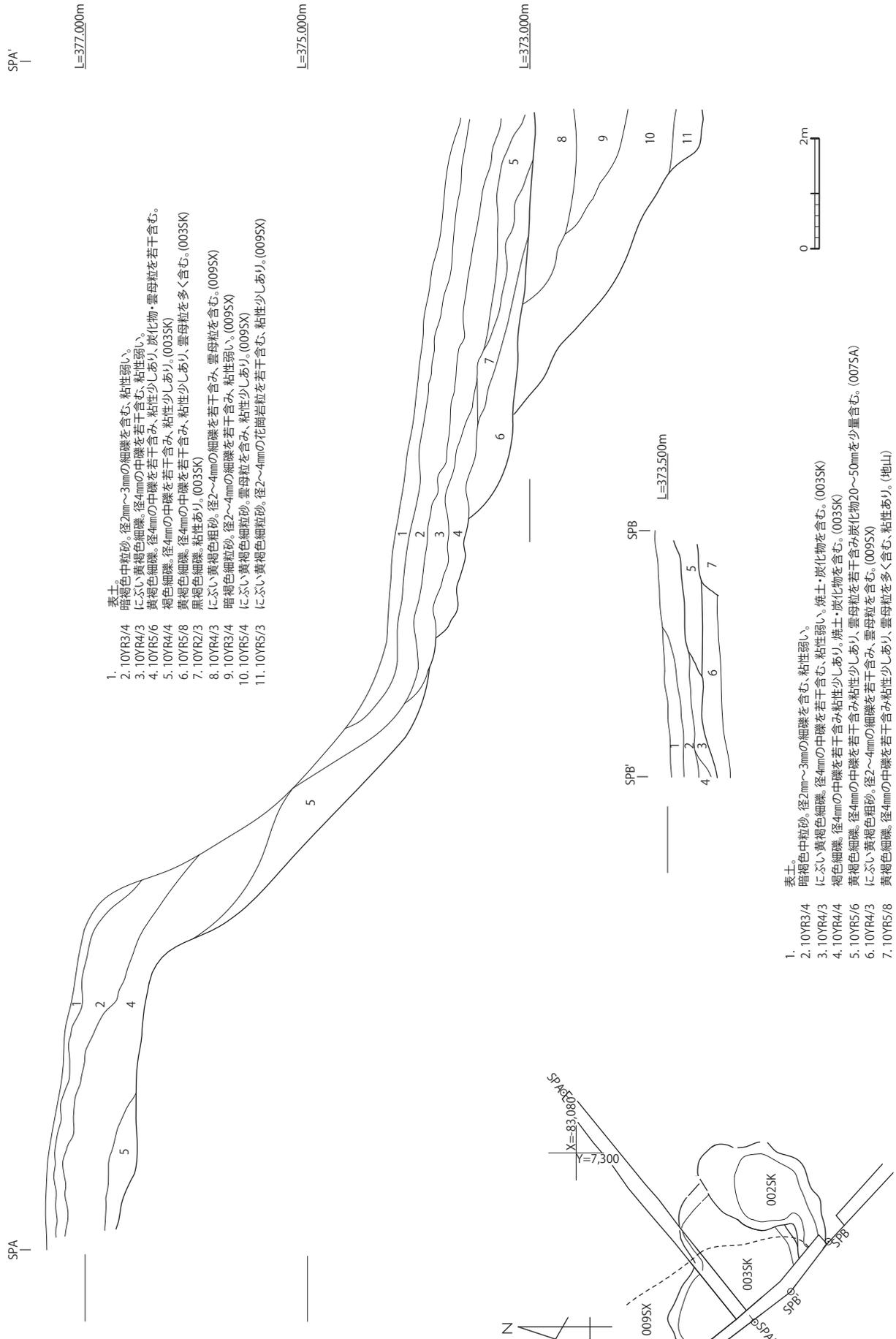


図3 調査区壁面図 1:200・1:50

加工も伴っていた可能性が高い。盛土は軟質となる。出土遺物は盛土中から得られた 18 と、上面から得られた 19～28 を図示した。

008SA (図 8)

調査区北西部で全長 9 m を検出したが、北西部は調査区外となる。図 8 の A ライン中央で計測した高さは 0.5 m 程度で、主軸は N-1°-E。南西端部を 004SK・005SD に切られる。断ち割り調査の結果、007SA と同様に盛土直下で基盤層が若干盛り上がる状況も確認でき、同様に成形時には基盤層の加工も伴っていた可能性が高い。盛土は軟質となる。出土遺物は上面から得られた 29 を図示した。

009SX (図 3)

調査区南西部の下段の平坦面で確認された整地層。整地により平坦面を拡張したもので、安全上の理由から、部分的な確認を実施したのみとなる。上面を 003SK・002SK・006SD に切られる。出土遺物は 30 を図示した。

010SX (図 4)

調査区北側の中段の平坦面端部で検出された。拳大～人頭大の礫で構成される小規模な集石遺構。001SK に近接するが関連は不明。石材はほぼ花崗岩で占められる。なお、010SX 南にも、拳大～人頭大の転石が散在しているが、関連は不明。

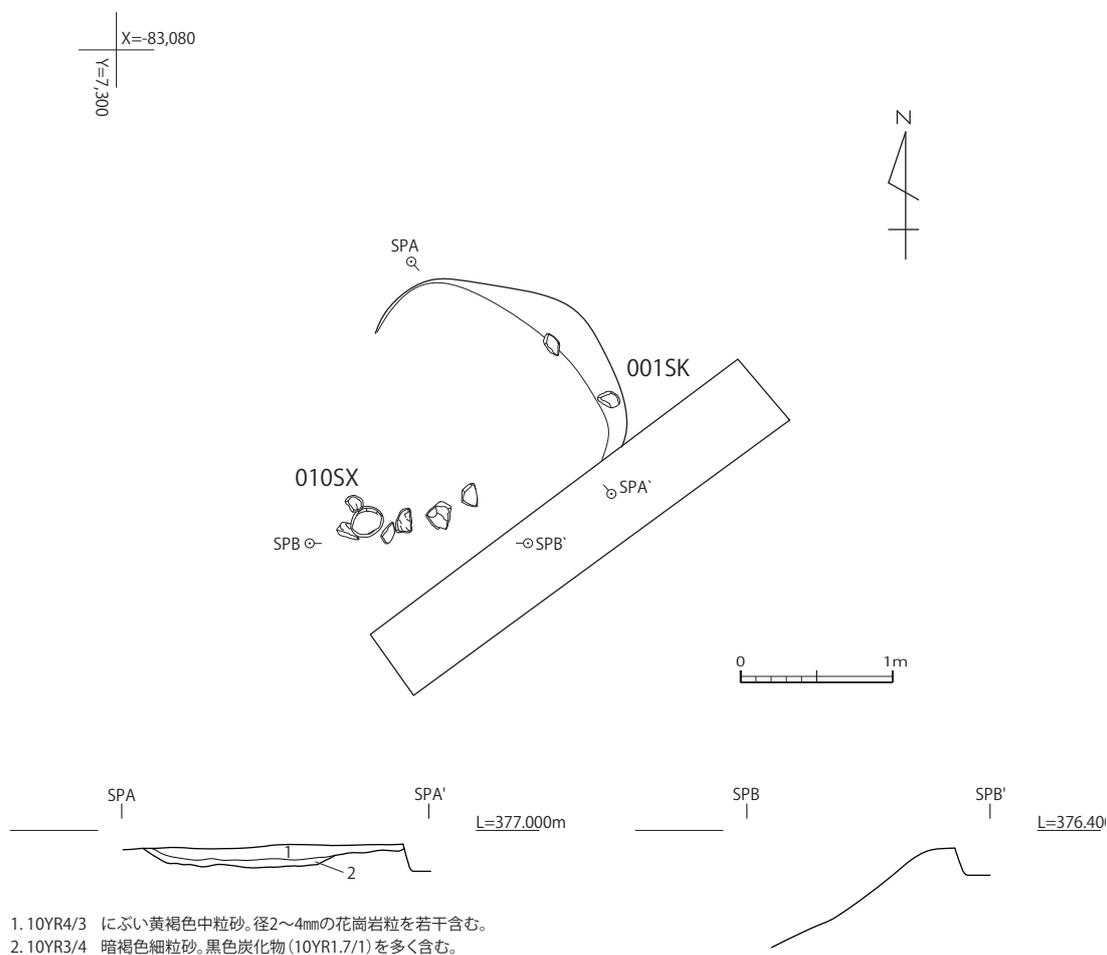


図 4 001SK・009SX 1:50

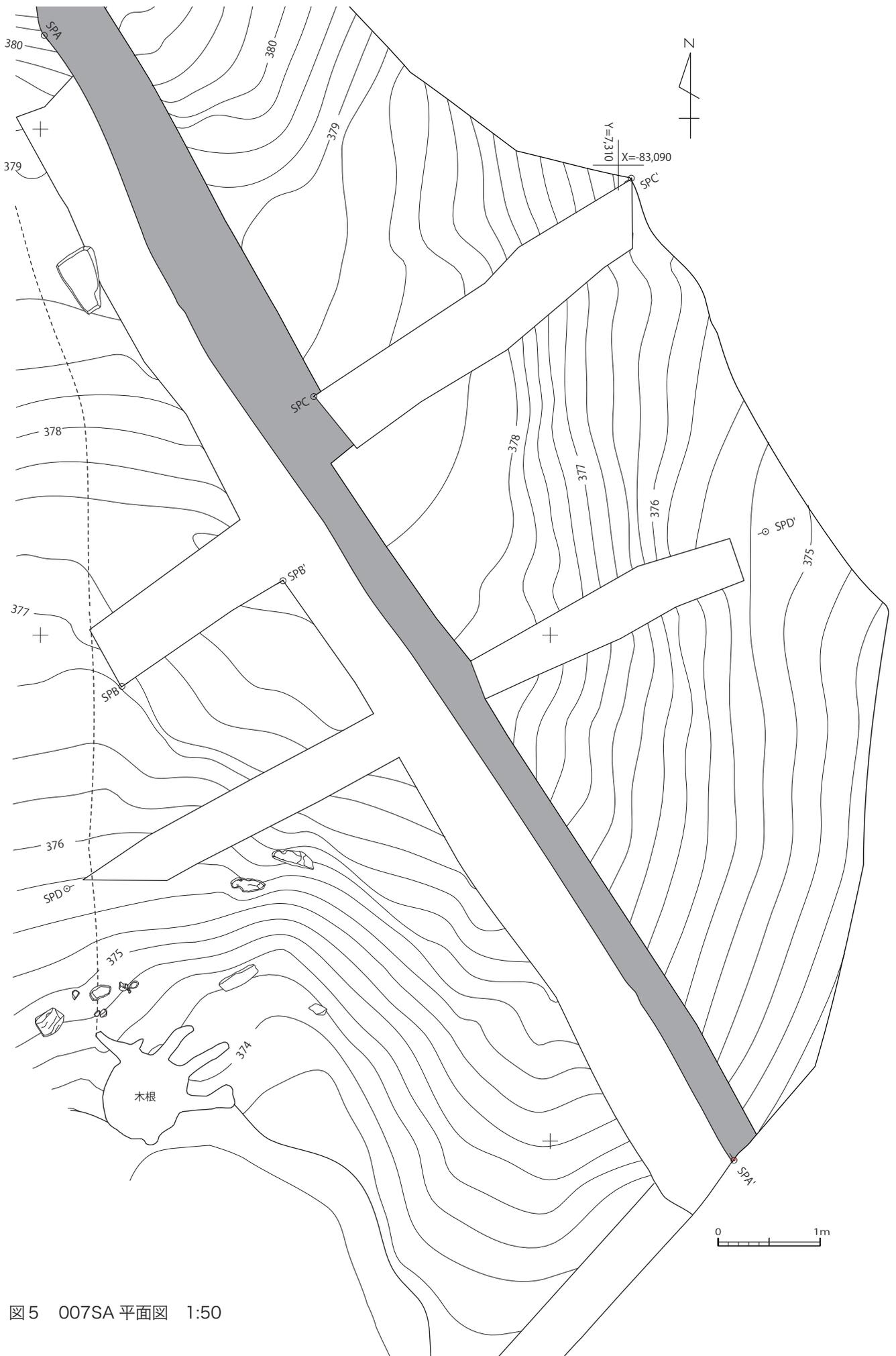
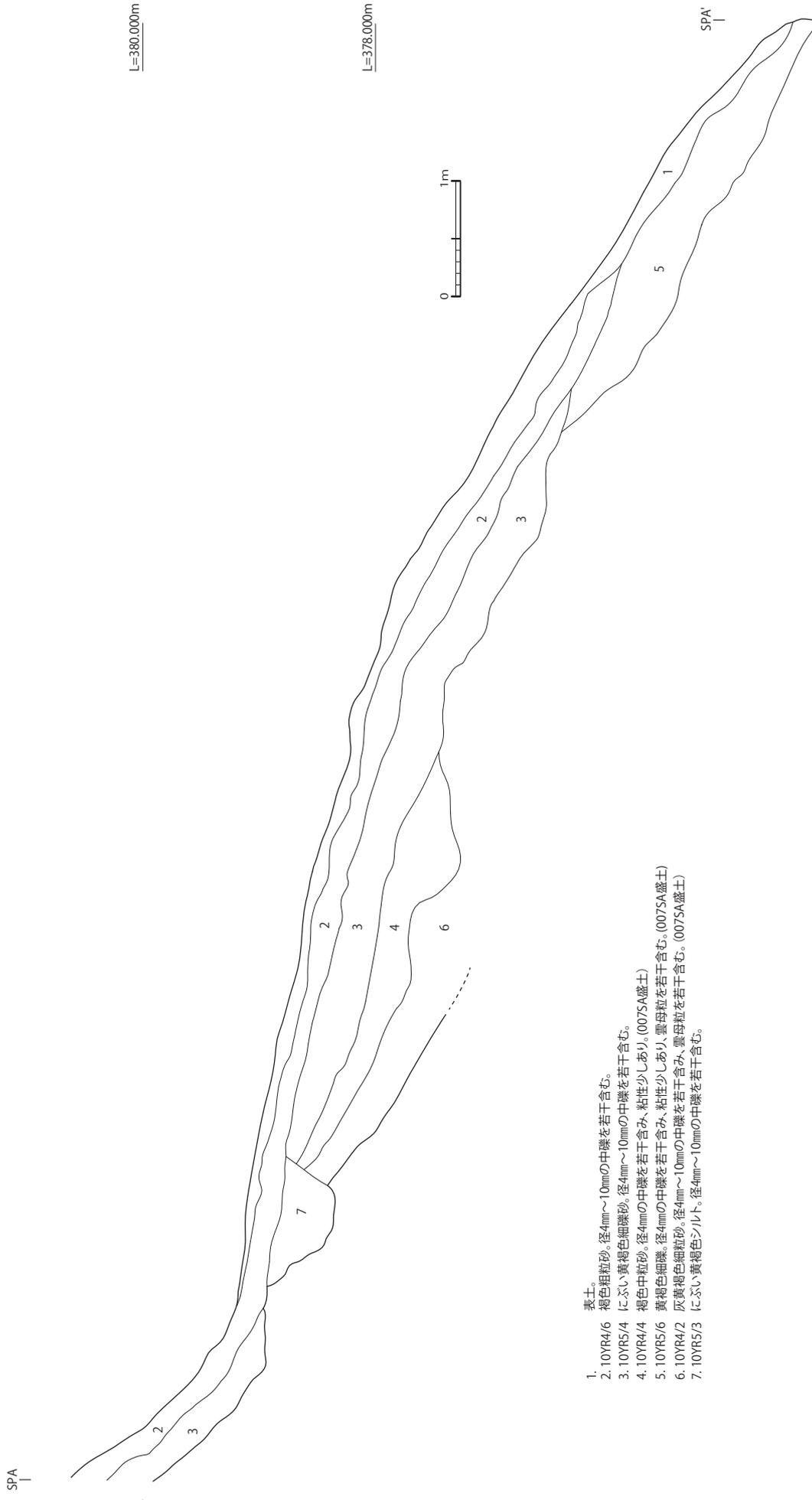
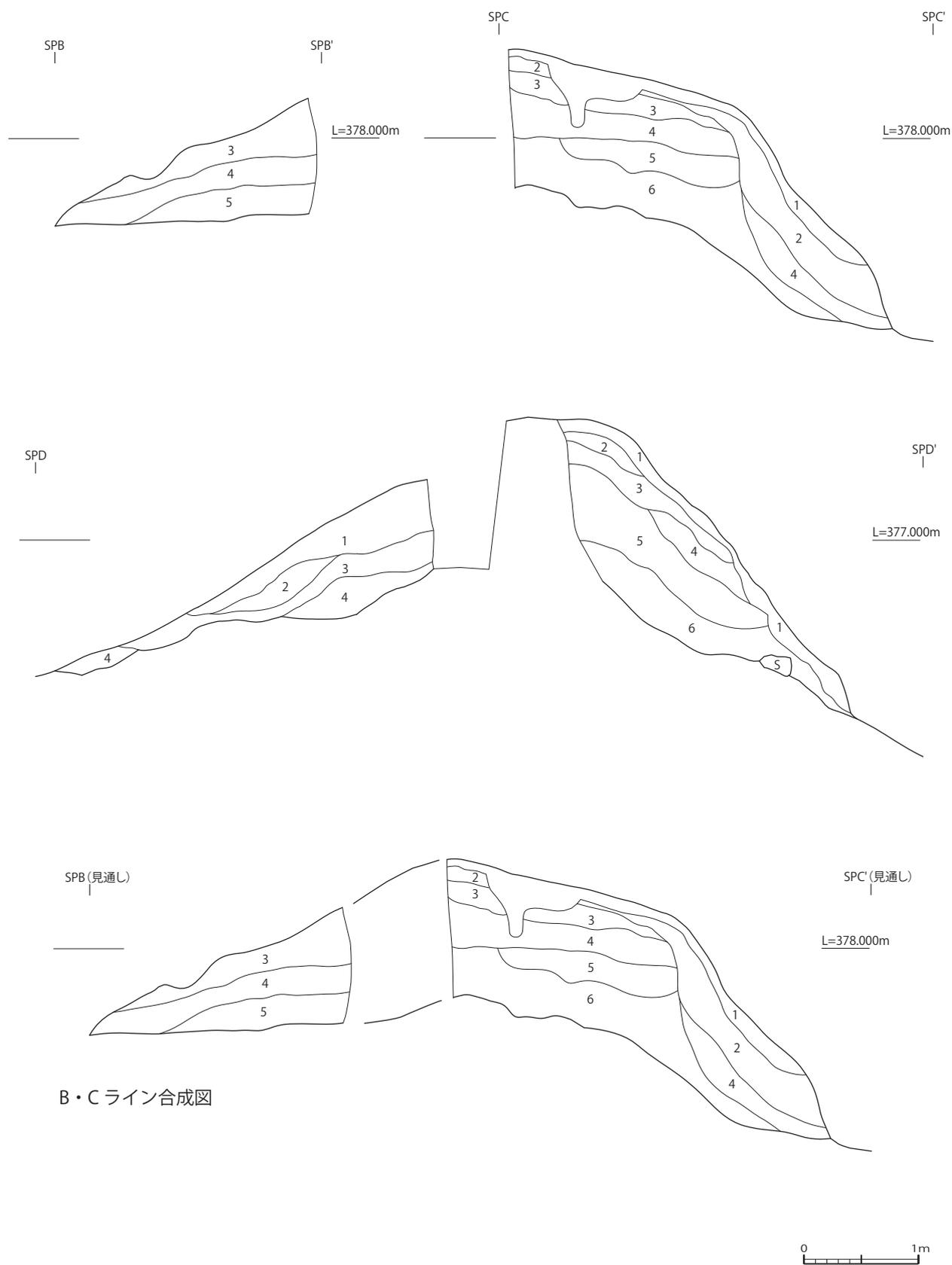


図5 007SA 平面図 1:50



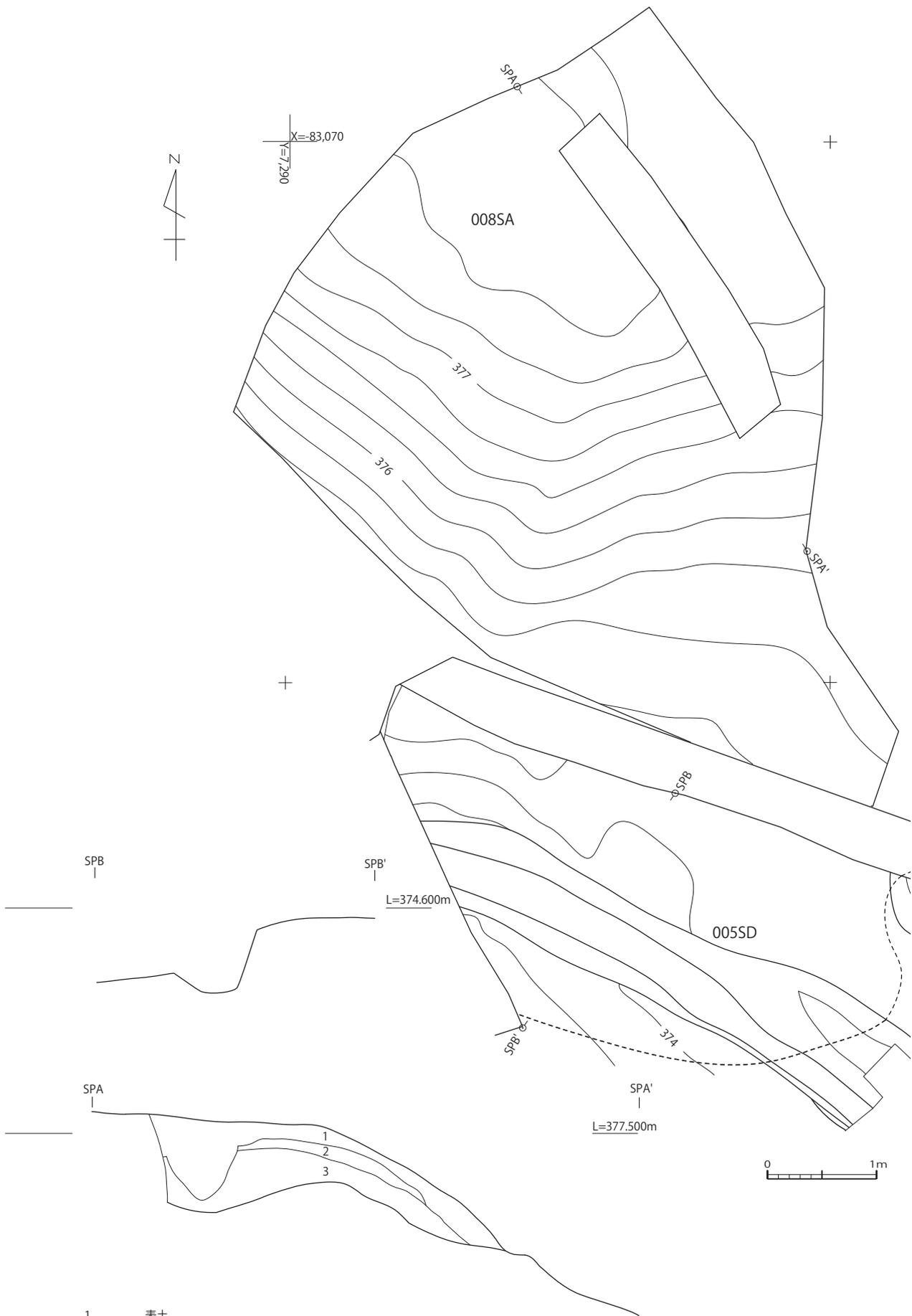
- 表土。
1. 10YR4/6 褐色粗粒砂。径4mm~10mmの中礫を若干含む。
  2. 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂。径4mm~10mmの中礫を若干含む。
  3. 10YR4/4 褐色中粒砂。径4mmの中礫を若干含む、粘性少しあり。(007SA盛土)
  4. 10YR5/6 黄褐色細砂。径4mmの中礫を若干含む、粘性少しあり、雲母粒を若干含む。(007SA盛土)
  5. 10YR4/2 灰黄褐色粗粒砂。径4mm~10mmの中礫を若干含む、雲母粒を若干含む。(007SA盛土)
  6. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト。径4mm~10mmの中礫を若干含む。

図6 007SA 縦断面図 1:50



B・Cライン合成図

図7 007SA 横断面図 1:50



1. 表土
2. 10YR4/4 粗粒砂、径4mm前後の中礫を若干含む。(008SA盛土)
3. 10YR6/8 明黄褐色粗粒砂、径4~10mm前後の花崗岩粒を多く含む。(008SA盛土)

図8 008SA・005SD 1:50

## 第3章 遺物

今回の調査により出土した遺物は、土器・陶磁器などがある。帰属時期は戦国時代～近世に及び、コンテナ4箱を数える。

以下、出土遺物を報告する。記述は遺構別の区分を優先させる方針をとり、法量などは、CD-ROMに格納する遺物計測一覧（添付データ2）を参照とする。

### 002SK（図9-1～10）

図示した資料は10点である。1～3はいわゆるせんじ。1・2は腰部に稜が確認できる。1は外面に笹をモチーフとした絵付けを施す。いずれも瀬戸登窯第8小期。4は碗の底部片。口縁部を欠く。丸みを持った腰部には鉄絵を施す。瀬戸登窯第8小期以降。5は志野丸皿でほぼ全形を留める。瀬戸登窯第3小期か第4小期。6は染付皿で内面には笹をモチーフとした絵付けを施す。瀬戸登窯第8小期。7は灯明皿。大窯第1段階。8は土瓶もしくは釜の底部片。古瀬戸後期Ⅲ～Ⅳ。9は搦鉢で口縁部片。大窯第1段階。10は焙烙の口縁部片で18世紀。

### 003SK（図9-11～14）

図示した資料は4点である。11～13は搦鉢で、内面には使用痕が確認できる。11は古瀬戸後期Ⅳ新、12・13は大窯第1・2段階。14は土師器皿。表面の風化が進み、詳細は不明。西三河産で15世紀末～16世紀前半。

なお、その他の出土遺物として、壁土の可能性を持つ焼土塊が多数出土している。大きさはほぼ拳大以下で、一部に平坦面やスサの混入も確認できる。胎土分析を実施しており、結果はCD-ROMに格納する（添付データ3）。

### 005SD（図9-15）

図示した資料は15のみである。端反皿もしくは丸皿の底部片。大窯第1・2段階。

### 006SD（図9-16・17）

図示した資料は2点である。16は四耳壺の肩部片。古瀬戸後期Ⅳ。内外面に鉄釉を施す。17は搦鉢の口縁部片。残存部分には使用痕は確認できない。古瀬戸後期Ⅳ新。

### 007SA（図9-18～28）

図示した資料は11点である。19～28が上面の検出中の出土で、18が盛土中からの出土となる。18は北部系山茶碗の小皿で、明和1号窯式。19は四耳壺の体部片。大型で内外面に灰釉を施す。破片は007SAの南西部に散在するが、002SKからも出土している。古瀬戸後期Ⅳ。20は仏餉具の口縁部片で大窯第1段階。21は天目碗の口縁部片。古瀬戸後期Ⅳ新。22～27は搦鉢で、22は底部片。23～26が口縁部片、27が体部片となる。22を除き使用痕は不明瞭。時期は22～24が大窯第1段階、25が大窯2期、26は古瀬戸後期Ⅳ新で、27は古瀬戸後期Ⅳ新～大窯第1段階となる。28は摺絵皿の口縁部片。美濃登5～6。なお、図示していないが、盛土中の資料には古瀬戸後期Ⅳ新に属する直縁大皿の小片も得られている。

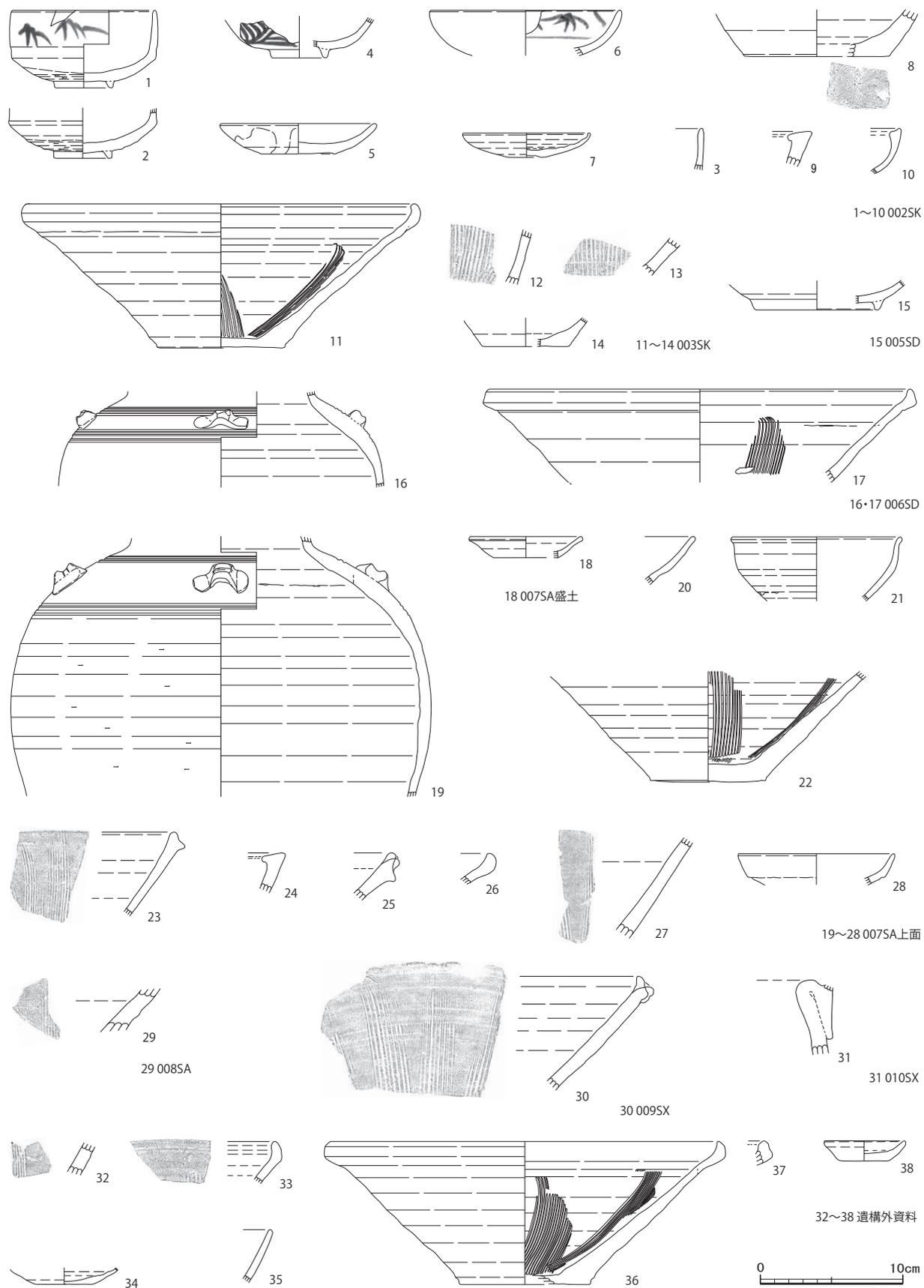


図9 遺物実測図 1:4

## 008SA (図9-29)

図示した資料は上面の検出中に出土した。播鉢の体部片で、内面に使用痕が若干確認できる。古瀬戸後期IV新～大窯第1段階。

## 009SX (図9-30)

図示した資料は整地土から出土した播鉢口縁部片で、内面に使用痕が若干確認できる。大窯1段階。

## 010SX (図9-31)

図示した資料は集石に近接して出土した。知多窯産甕の口縁部小片で、10型式期に属する。

## 遺構外資料 (図9-32～38)

図示した資料は7点である。32～35は調査区内から出土。32・33は播鉢で、前者が古瀬戸後期IV新～大窯第1段階、後者が古瀬戸後期IV新。34は土師器皿で、外底部には回転糸切り痕を留める。36～38は調査区近接地から表採された資料だが、一応ここで報告する。36・37は播鉢。36は内面には使用痕が確認でき、底部は穿孔する。古瀬戸後期IV新。37は口縁部片で大窯第1段階。38は土師器皿で、外底部には回転糸切り痕を留める。西三河産で15世紀末～16世紀前半。



図10 焼土塊

# 第4章 まとめ

## 1 主要遺構の変遷

ここでは、今回の調査で確認できた遺構を時期別に整理する。前述した様に今回の調査区は狭小であり、出土遺物も断片的となっている。このため、多分に恣意的な区分となってしまう事は否めない。図11に提示した主要遺構の変遷案は、こうした問題点を内在させている事をあらかじめ断っておく。

まず、出土遺物を概観すると、古瀬戸後期～大窯第1・2段階と近世に大別できる。ここでは前者をA期、後者をB期と区分する。

A期に含まれる遺構は003SK・007SA・008SA・005SD・006SD・009SXなどで、下段の平坦面およびその周囲に分布する。009SXが平坦面の拡張を目的とした整地面で、東側には007SAが敷設される。007SAは検出された端部が下段側に向けてわずかに屈曲しており、下段平坦面を意識している可能性が強い。西側に位置する008SAも盛土中から出土遺物を得ていないが、やはり同時期と考えておく。このように考えるのであれば、下段平坦面は斜面側を拡張し、主郭側が急峻な斜面となり、東西に土塁を有した構造となる。A-1期とし、15世紀後半～16世紀初頭頃と捉えておく。

一方、005SD・006SDと003SKはいずれも不整形で、005SDは008SAを切る。このため、これらの遺構は若干後出となる可能性が高い。003SKから確認できたスサ入り焼土塊が壁土ならば、壁土を使用する何らかの構築物が下段平坦面に存在し、003SKの掘削以前にこれが廃絶しているものとも考えられる。なお、不整形な形状は006SDも同様で、この段階に下段平坦面で整地を伴う様な作業がなされたものと考えられる。A-2期とし、16世紀前半頃と考えておく。

B期に属する遺構は、明瞭には002SKを確認したのみだが、004SKもこの時期に属する可能性が高い。いずれも性格は不明確だが、18世紀後半を中心とする段階に、何らかの土地利用があった事は想定できる。出土遺物の帰属時期から大平本城の廃城後と考えておく。

## 2 大平本城と今回の調査区

今日、小原地区は郷土史の研究、特に城館に関する関心が深い地域として知られている。このため、研究成果が幾つか提示されており、大平本城もその中で度々考察が試みられている。これらを文献毎に要約する。

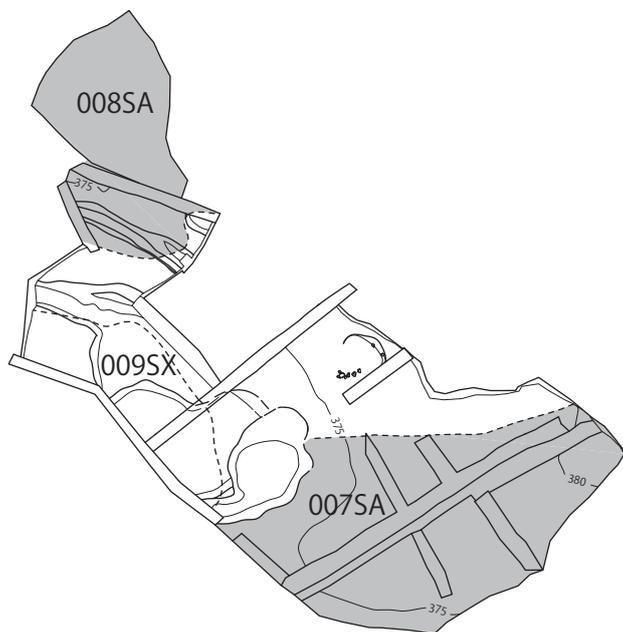
・『三河国二葉松』(天文5(1740)年成立・昭和44(1969)年 渡辺政香編『三河志』(下))

三河一国をまとめた最初の地誌として知られるが、小原郷の城跡としては「大草村古城」「市場村古城」「田代村古城」「永太郎村古城」をあげ、大平本城の記載は存在しない。

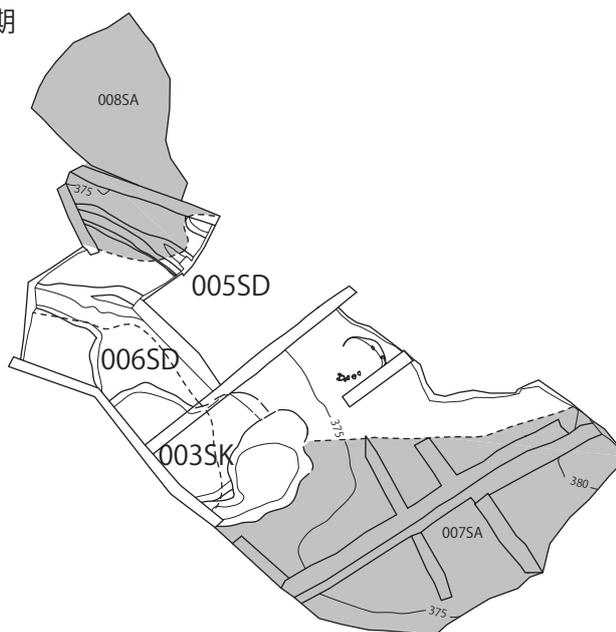
・愛知縣西加茂郡教育會 大正15(1926)年『西加茂郡誌』

管見によれば、大平本城が最初に紹介された文献で「應永年間領主大河内下総守久政の居城であったといふことである」と紹介されている。ただし、大平にある城跡として紹介されたもので、ここでは固有の名称は用いられていない。なお、下記に詳細が紹介される錢貨の出土も記述する。

A-1 期



A-2 期



B 期

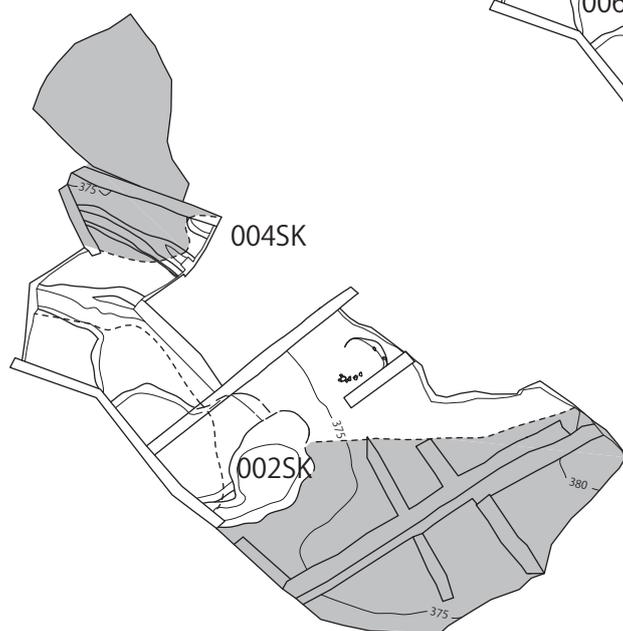


図 11 遺構変遷図 1:300

X=83000

X=83050

Y=7350

Y=7300



X=83000

X=83050

図 12 地形測量図 1:500



※ 図中の・Aは図14と一致する



図 13 周辺の地籍図

・愛知縣 昭和14(1939)年「小原村大字大平古銭出土地」『愛知縣史蹟名勝天然記念物調査報告・第17』  
 総重量が約二十貫に及ぶ銭貨の出土状況の取材と銭種の分類報告である。大正12(1923)年に大平本城と大平姫城に挟まれた傾斜地を削平した時に、地下約三尺から正方形に近い塊状で出土したとされる。容器は確認できなかったという。出土地点は大平姫城の東側と報告される。ここでは大平本城を「本丸格の大平城址」と呼び、大平本城との有機的関連を示唆している。なお、「戦国時代に大河内某の居城であったといひ、畑となつてゐる…」とも記述している。

・小原村誌編集委員会 1964 『小原村誌』

ここでは「大平城址」として紹介されている。大内下総守久政の居城とし、前二者と城主名が異なる。さらに文正元(1466)年に岩津城主松平信光の攻撃により落城したと記述するなど、落城伝承も新たに加わる。

・小原村教育委員会・小原村文化財保護委員会 1977 『小原の城址』

基本的には『小原村誌』の記述を継承する。大平本城を男城、大平姫城を女城とも呼称するが、両者の関連は不明とする。

・千田嘉博 1991 「市場城」『定本 西三河の城』 株式会社郷土出版社

市場城の説明文中に触れた周辺の城館の概要に「大平城」の名称で登場している。『小原村誌』の記述も引用しているが、新たに遺構の検討もなされ、大平本城と大平姫城を有機的に関連するものと考えられる。大平本城の基本構造は、南に伸びる尾根の南北を堀切により遮断したものと想定した。現存する南側の堀切には横矢を掛ける構造が確認されることから、『小原村誌』に記述されている落城以降も存続した事を指摘している。千田嘉博氏による縄張図も掲載されており、遺構の分析を試みた最初の作業として注目できる。

・千田嘉博 1993 『小原の城郭』 小原村教育委員会

千田氏による縄張図が拡大されて再掲載され、さらに遺構の検討を加える。ここでは「大平本城・姫城」の名称を使用し、大平本城で特徴的となる南側の堀切と土塁による防御構造を、『定本 西三河の城』段階よりさらに詳しく検討を加える。

・浅井 敏 1993 「大平本城」「大平姫城」『藤岡・小原・旭の中世城館』 愛知中世城郭研究会

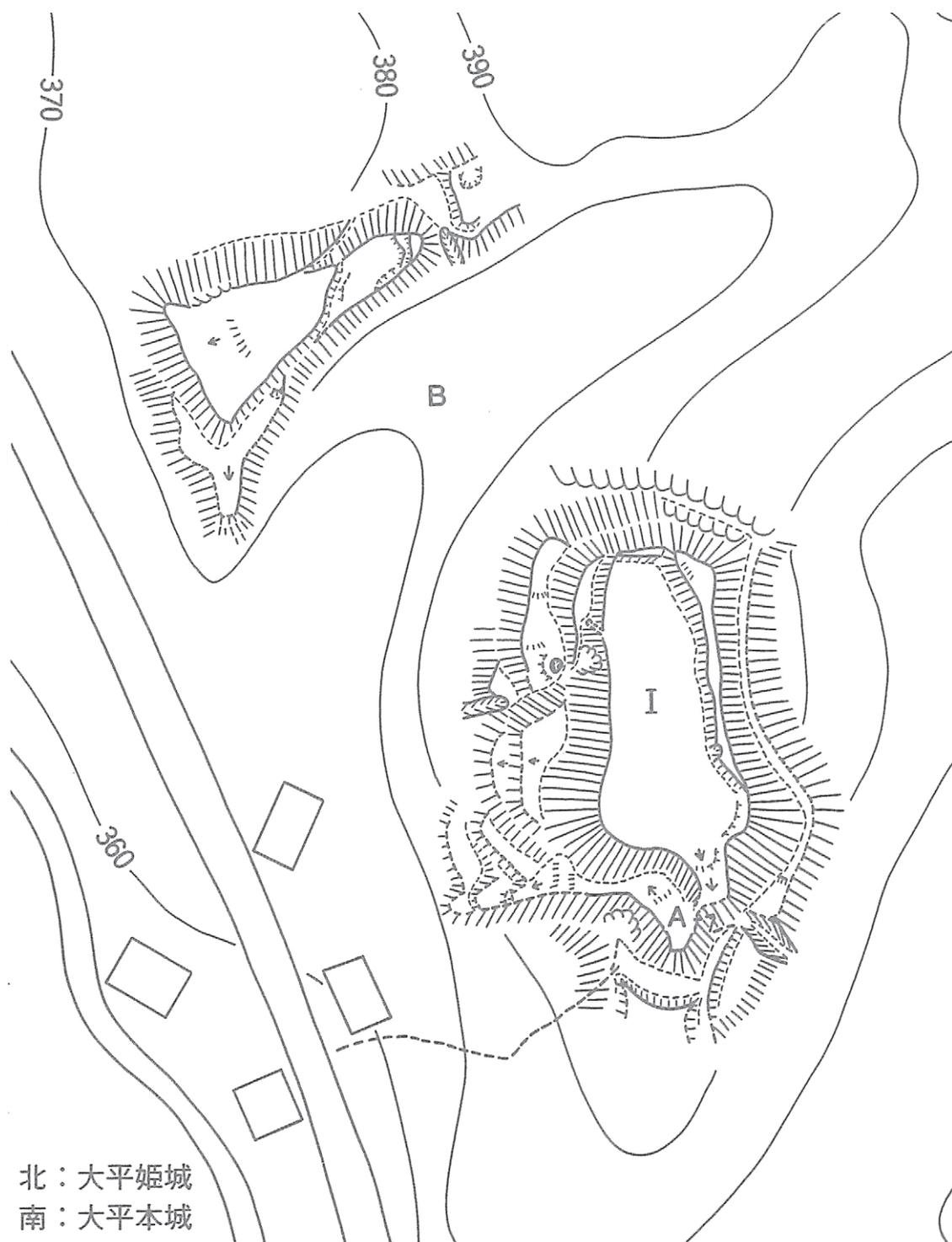
浅井氏による縄張図が掲載される。千田氏による遺構の分析を継承しながら、遺構がさらに西側に広がる事を指摘する。また、『小原村誌』による松平信光による落城伝承を否定し、これを市場城の鱸氏が周辺に勢力を浸透させる過程の出来事と推定している。

・高田 徹 1994 「大平本城(男城)」「大平姫城(女城)」『愛知県中世城郭調査報告』II 愛知県教育委員会

高田氏による縄張図(図14)が掲載される。千田氏・浅井氏による遺構の分析を継承しながら、大平本城が東・南・北が堀切と土塁、西側が開く形態、大平姫城が東側の堀切で基本的な防御を整えた事を指摘する。

・堀木真美子・鈴木正貴 2014 「豊田市乙ケ林出土銭の蛍光X線分析」『研究紀要』第15号 愛知県埋蔵文化財センター

豊田市乙ケ林出土銭の分析を主題とするが、前述した大平本城出土銭貨も比較資料として検討される。



愛知県教育委員会『中世城館跡調査報告Ⅱ』1994より転載

図 14 縄張図

次に、今回の調査区が城郭のどの部分に該当するのかを考えたい。

前述の様に大平本城は過去の研究成果もあり、何人かの研究者による縄張図も紹介されている。

本書では高田 徹氏による大平本城と大平姫城の縄張図（高田 1994）を図 14 に転載し、図 12 に調査段階の周辺測量図、図 13 に地籍図も掲載した。

今回の調査区は大平本城の西側に該当している。この部分について浅井氏は「数段の曲輪状のもの」が確認されると指摘している（浅井 1993）。ところで、図 12 には、調査区の東側にある墓地のさらに東側で南北に伸びる土塁状の高まりが確認できる。大平本城で最も特徴的となる南側の堀切から連続する位置に該当している事からも、この高まりが大平本城の土塁である可能性は極めて高い（注）。この事を考えると、この土塁と並行する形に位置する 007SA・008SA も、小型ではあるが大平本城の土塁であった可能性は高い。

前述した様に 007SA・008SA に挟まれたエリアには三段の平坦面が確認されている。このうち調査区内でほぼ全容を確認した下段平坦面は、南北も急峻な斜面となっている。この部分を切岸と考えるのであれば、下段平坦面は大平本城の曲輪と理解できる。この曲輪の造成時期は、009SX 出土遺物の帰属時期を評価するのであれば、15 世紀後半～16 世紀初頭頃と考えられる。

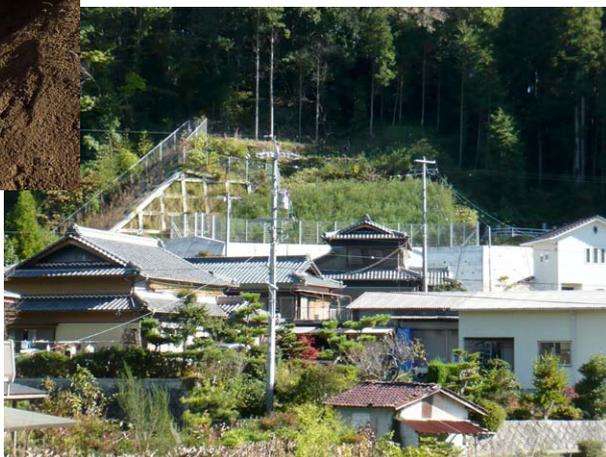
次に、A—2 期の遺構の形成にも注目したい。当該期の 003SK からは 16 世紀前半頃までの遺物が出土している。003SK は整地を示唆させる状況だが、曲輪の改修に伴う遺構なのか、廃城もしくはその後の再利用に関連するのかは判断できない。

こうした状況は、千田氏による遺構の分析成果から得られた文正元（1466）年の落城伝承以降も大平本城が存在していた可能性と整合する（千田 1991）。しかし、今回の調査区は面積も狭小で、大平本城の継続的時期や全体像を明らかにできるものではない。今後の課題である。

（注）高田 徹氏のご教示による。

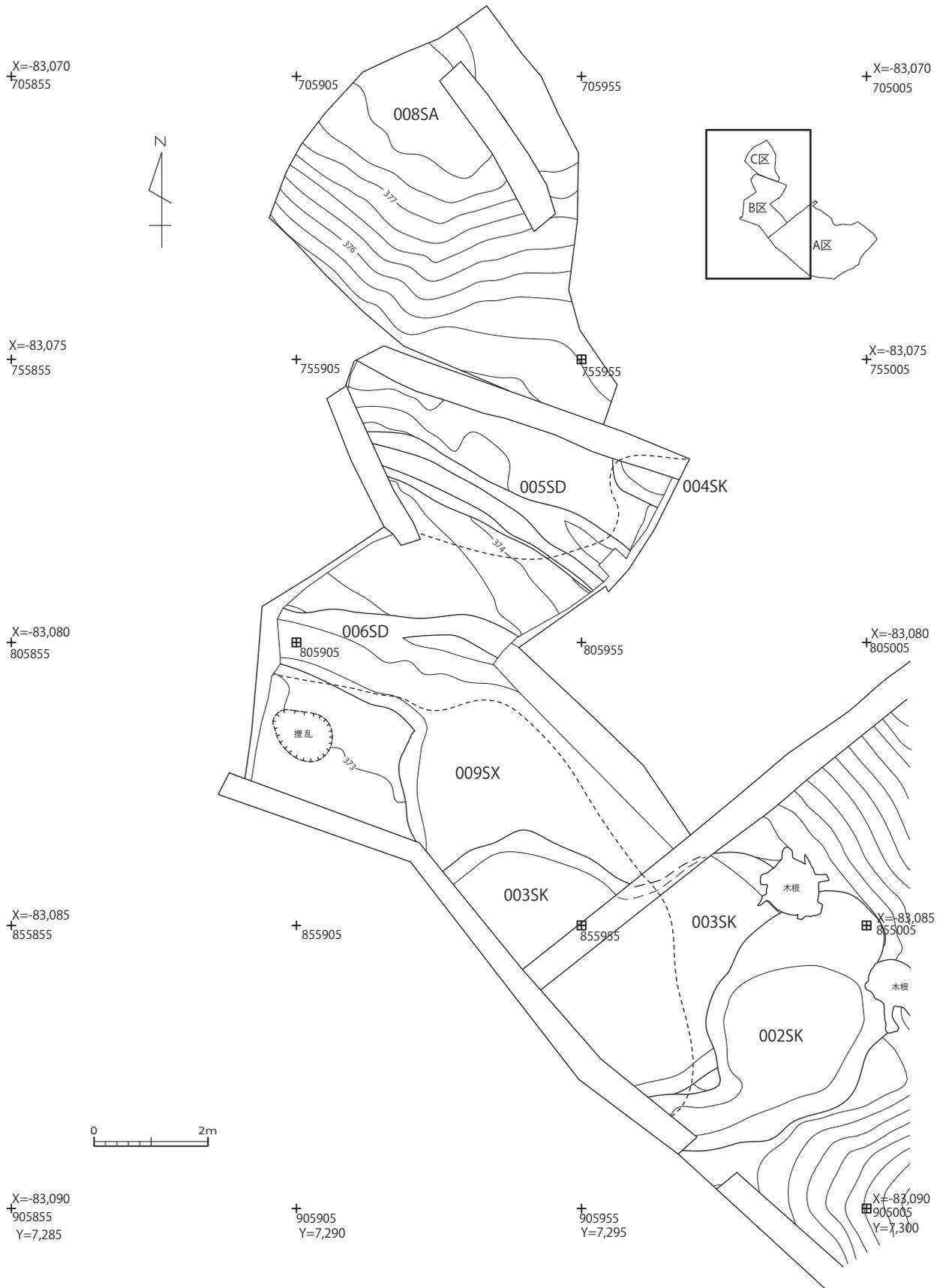


◀ A区作業風景

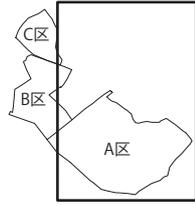


調査区現状 2014.10 ▶

図版1 調査区全体図 1 : 100



図版2 調査区全体図 2 1 : 100



+ 755005

+ 755055

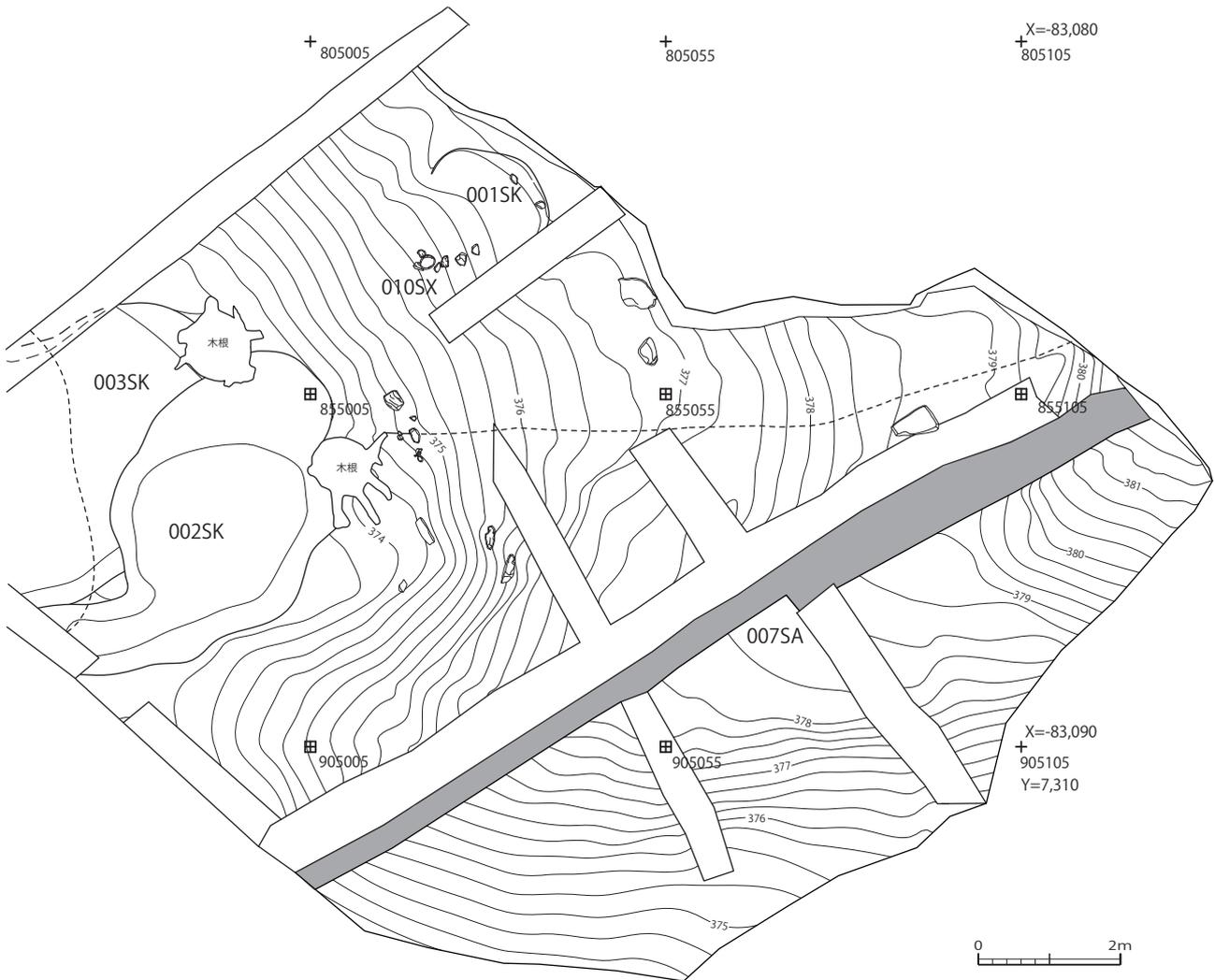
X=-83,075  
+ 755105



+ 805005

+ 805055

X=-83,080  
+ 805105



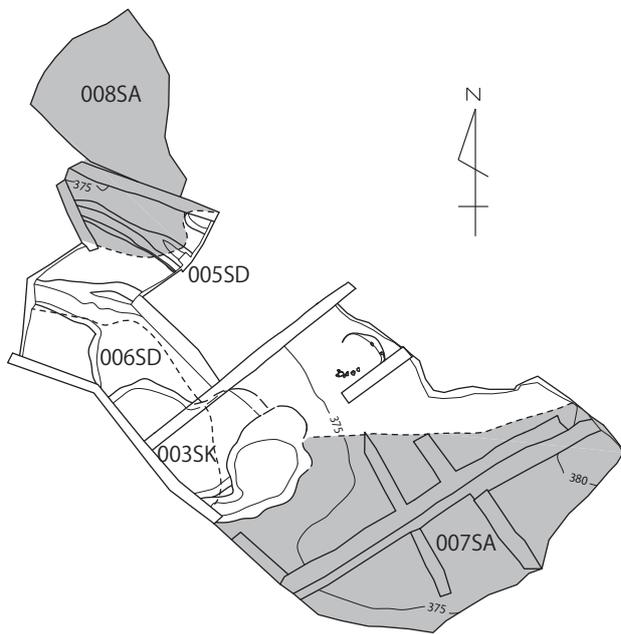
X=-83,090  
+ 905105  
Y=7,310

## 概要

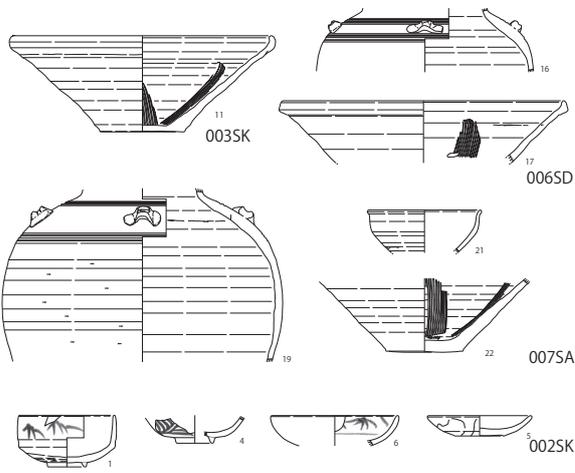
発掘調査は急傾斜地崩壊対策事業に伴うもので、愛知県教育委員会を通して委託を受けた愛知県埋蔵文化財センターが実施した。調査は面積 310m<sup>2</sup>。調査期間は平成 23 (2011) 年 10 月～11 月である。

大平本城は、昭和 39 (1964) 年刊行の『小原村誌』によると、大内下総守久政の居城とし、文正元 (1466) 年に岩津城主松平信光の攻撃により落城したとされる。

今回の調査区は、大平本城の南側斜面となる小規模な三段の平坦とその間の斜面となる。調査の結果、下段の平坦面の東西に土塁が検出された。前面と背面は急峻な斜面となり、大平本城の南側の曲輪の一つであったと考えられる。



主要遺構 1:300



出土遺物 1:8





調査区遠景 南から



調査区遠景 東から



A区全景 南から



A区全景 西から



001SK



007SA



007SA 縦断面



写真図版4 出土遺物



報告書抄録

| ふりがな               | おおだいらほんじょう   |       |        |                  |                    |            |      |                |
|--------------------|--|-------|--------|------------------|--------------------|------------|------|----------------|
| 書名                 | 大平本城   |       |        |                  |                    |            |      |                |
| 副書名                |  |       |        |                  |                    |            |      |                |
| シリーズ名              | 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書  |       |        |                  |                    |            |      |                |
| シリーズ番号             | 第 201 集  |       |        |                  |                    |            |      |                |
| 編著者名               | 池本正明   |       |        |                  |                    |            |      |                |
| 編集機関               | 公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター   |       |        |                  |                    |            |      |                |
| 所在地                | 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-2 TEL 0567-67-4161  |       |        |                  |                    |            |      |                |
| 発行年月日              | 西暦 2015 年 3 月 31 日   |       |        |                  |                    |            |      |                |
| 収蔵遺跡名              | 所在   | コード   |        | 北緯               | 東経                 | 調査期間       | 調査面積 | 原因             |
|                    |  | 市町村   | 遺跡番号   |                  |                    |            |      |                |
| おおだいらほんじょう<br>大平本城 | とよたしおおだいらちよう<br>豊田市大平町<br>しちやしま<br>下屋敷   | 23211 | 663001 | 35°<br>15'<br>7" | 137°<br>14'<br>46" | 2011.10～11 | 310㎡ | 急傾斜地<br>崩壊対策事業 |
|                    |  |       |        | 世界測地系による         |                    |            |      |                |
| 文書番号               | 発掘届出 (23 埋セ 72 23.8.23)、通知 (23 教生 1561 23.10.11)、修了証・保管証 (23 埋セ 125 23.11.30)、鑑定通知 (24 豊教 2824 24.4.6) |       |        |                  |                    |            |      |                |
| 収蔵遺跡名              | 種別   | 主な時代  | 主な遺構   | 主な遺物             |                    | 特記事項       |      |                |
| おおだいらほんじょう<br>大平本城 | 城館   | 戦国時代  | 土塁・土坑  | 施釉陶器・土師器         |                    |            |      |                |
| 要約                 | 土塁に東西を挟まれた平坦面を確認した。南北は急峻な斜面となり、曲輪と考えられる。南側は造成土により拡幅されており、この部分からは 15 世紀後半～ 16 世紀初頭頃に属する古瀬戸播鉢片が出土している。   |       |        |                  |                    |            |      |                |



愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第201集

## 大平本城

2015年3月31日

編集・発行 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団  
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 サンメッセ株式会社

